国公立大学の個別試験における英語リスニングテストの動向調査

杉澤武俊・椎名久美子・内田照久（大学入試センター 研究開発部）

国公立大学の個別入学試験での英語リスニングテストは，平成18年度のセンター試験のリスニングテストの導入を期に急激に減少している。この個別入試でのリスニングをめぐる状況についての動向調査を行った。その結果，個別リスニングの現況については，マスコミなどで取り沙汰される放送事故や騒音対策等の実施面での負担よりも，むしろ，その前段の試験問題の作成にかかる負担が大きく，特に他の試験では用いられない音声メディアを作成する段の負担が大きいことがわかった。また，センター試験のリスニング導入後も個別リスニングを継続している大学では，センター試験のリスニングと比較して，問題の内容や難易度などについてより強い独自性を意識しており，より専門性の高い適性を入学者にもとめている様相が確認された。

1. はじめに

平成 18 年度の大学入試センター試験より，「英語」にリスニングテストが導入された。従来は，入学志願者に英語のリスニングテストを課したい場合，大学が実施する個別試験において独自にリスニング問題を出題する必要があったが，この平成18年度からはセンター試験のリスニングテストをもって，それにあてることが可能となった。

歴史的に見ると，個別試験における英語リスニングテストは，高校の英語に当時新たに導入されたオーラル・コミュニケーション科目を学習してきた生徒が大学受験をする平成9年度から平成12年度頃まで，コンスタントに増加の傾向を辿ってきた。そして，その後，平成17年度までは，ほぼ横ばいの状態で推移してきたことがわかる(図 1)（文科省・大学入試センター 調べ)。

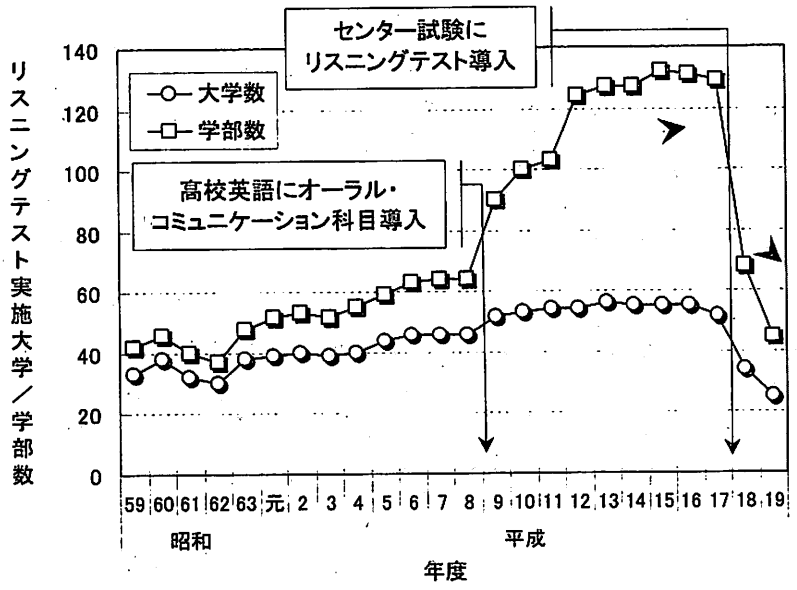


図 1：個別試験における英語リスニングテスト実施大学・学部数の推移(国公立大学合計)

しかし，センター試験にリスニングテストが導入された平成 18 年度からは，一転して急激な減少へと転じている。この間，個別のリスニングは，実施学部数で約 1/4 に，大学数では半減している。おそらく現在もなお，減少傾向にあるものと予想される。

平成 19 年度現在，個別のリスニングを課す国公立大学の数は，現在の大学入試センター試験は元より，それ以前の共通第一次学力試験の時代まで遡っても，歴史的に最も少ないという状況に至っている。

このように急激な状況の変化に際して，センター試験のリスニングテストと，各大学が実施する個別試験でのリスニングテストについて，それぞれの役割，相互の補完的な位置づけを改めて捉え直しておく必要がある。

特に個別大学でのリスニングテストを巡る現状を把握することによって，今後のセンター試験のリスニングテストが担うべき役割をより明確にし，目指すべき方向の指針にすることができよう。

また個別大学においては，他大学での状況を間接的に知ることで，個別試験でのリスニングテストの導入・存廃を含めた入試のあり方を検討するための手がかりにすることができると考えられる。

2. 調査の手続

2.1 調査実施時期

平成 18 年 11～12 月。(10 月 31 日調査票発送，12 月 11 日督促状発送)

2.2 調査対象

平成 17 年度以降の入学者選抜において，個別試験で英語のリスニングテストを 1 度でも実施した，もしくは新たに導入予定の国立大学法人および公立大学を調査の対象とした。該当する大学は 50 大学であった。

この調査対象となった大学について，平成 17 年度から 19 年度までの 3 年度分の入学者選抜におけるリスニングテストの廃止や継続などの実施状況に応じて，表 1 に示す 5 つのカテゴリに分類した。表 1 には，各カテゴリにおける平成 17～19 年度までのリスニングテストの実施状況も示す。表中で，○印は当該年度にリスニングテストを実施，×印は実施しないことを表す。

表の「大学数」の合計は 60 で，調査対象となった大学数の 50 よりも多くなっているが，これは同一大学内でも学部(募集単位)によってリスニングテストの実施状況の動向が異なる場合があるためである。混乱を避けるため，以下では各調査大学の中で，同一カテゴリに属する募集単位の集合を「調査ユニット」と呼ぶこととする。

表 1：調査対象大学のカテゴリ分類

カテゴリ	大学数	平成 17	平成 18	平成 19
A:平成 18 年度にリスニングテストを廃止	24	○	×	×
B:平成 19 年度にリスニングテストを廃止	11	○	○	×
C:平成 17～19 年度まで継続してリスニングテストを実施	23	○	○	○
D:平成 18 年度から新規にリスニングテストを導入	1	×	○	○
E:平成 18 年度のみリスニングテストを実施	1	×	○	×

対象となった50大学60調査ユニットのうち，49大学58調査ユニットから調査票が返送された(回収率：96.7%)。

なお，こちらが念頭においていた調査ユニットの中を，学部の違いなどによって，さらに分割して異なる調査ユニットとして回答を寄せた大学もあった。それらについては，大学側の意図を反映して別ユニットとして集計した。その結果，最終的な調査ユニット数は62となった。

2.3 回答者

調査票は各大学の入試担当課の課長宛に郵送し，入学者選抜におけるリスニング科目の存廃に関わる議論の経緯をよく知っている責任者の教員に記入してもらうよう，依頼した。

2.4 調査項目の概要

質問調査の内容の骨子は，主に次の通りであった。

(1) 個別試験でのリスニングテストの試験問題の作成環境と実施状況，
(2) 問題作成および試験実施にかかる労力・負担，
(3) センター試験のリスニングテストと個別試験のリスニングテストの比較，
(4) 個別試験のリスニングテストの廃止や継続に関する議論の背景，
(5) 各大学における英語教育に対するポリシー，
(6) センター試験のリスニングテストに関する評価。

なお，大学のカテゴリ分類ごとに，リスニングを廃止した大学，継続している大学といった相違点があるため，質問項目の表現や内容は一部異なっていた。

3. 調査の結果

本調査の結果は多岐に渡っており，一方，本報告では紙面の制約もあるので，全ての結果を網羅することはできない。本報告では，まず個別試験のリスニングテストに特徴的な事項をまとめ，その上で，リスニングテストを平成18年度，または19年度に廃止した大学と，その後も継続している大学とに区分して，それぞれの特徴について検討する。

3.1 個別試験におけるリスニングテストの概況

リスニングテストでは，ネイティブ・スピーカーを確保して音声を録音し，それをテストの形に編集し，試験で使用する音声メディアの形にまで仕上げる必要がある。試験の実施にあっては，騒音の防止や機器の故障がないように留意した慎重な運営がもとめられる。ここでは，問題の作成から試験実施に至るまでの担当者の確保状況や，段階ごとに，どれ程の労力が必要であったかについて尋ねた。

3.1.1 試験問題の作成に従事する担当者

ネイティブ・スピーカーについては，ほぼ全ての大学で，学内の教員を話者としていた。例外的な事例は2件で，1つは話者として留学生を採用したケース，もう1つは海外の大学の教員に個別に依頼し，海外で録音まで済ませたケースである。いずれも，基本的に大学内の教員1〜3名が話者として音声の収録にあたっていた。

次に，録音した音声の編集作業についてもほぼ全ての大学で教員が担当していた。なお，3つの大学では，教員の他に事務職員や技官と共同で作業したと回答したところがあった。

上記の話者の確保や編集作業に関して，外部のプロダクションなどの業者に依頼したとする回答は皆無であった。まれに県別の高校入試などでは，リスニングテストの編集などを業者に委託するような事例も聞かれる。しかし，本調査が対象とした大学の個別入試のリスニングテストに関しては，入試問題の秘匿を期すため，業者委託は慎重に避けている状況が確認できたと言える。

3.1.2 問題作成と試験実施にかかる労力

リスニングテストに特徴的な問題作成段階における結果を図2に示す。話者の選定や確保については，それほどの労力は必要とされていないが，試験問題音声の収録，編集，メディアの作成にあたってかかる労力や負担はかなり大きいことが読み取れる。

試験実施段階についての結果を図3に示す。騒音対策や機器のトラブルへの対処にかかる負担も少なくないことがわかる。

ここで着目すべき点は，この機器の故障に対する試験実施面での負担と比しても，録音やメディア作成にかかる負担感の方がかなり大きい点である。マスコミ等によるリスニング実施時のトラブルに関する報道が多いため，そちらの方が目につきやすいが，実際の運営においては，音声問題の作成に関わる労力や作業負担の方がむしろ大きい点について，留意が必要である。

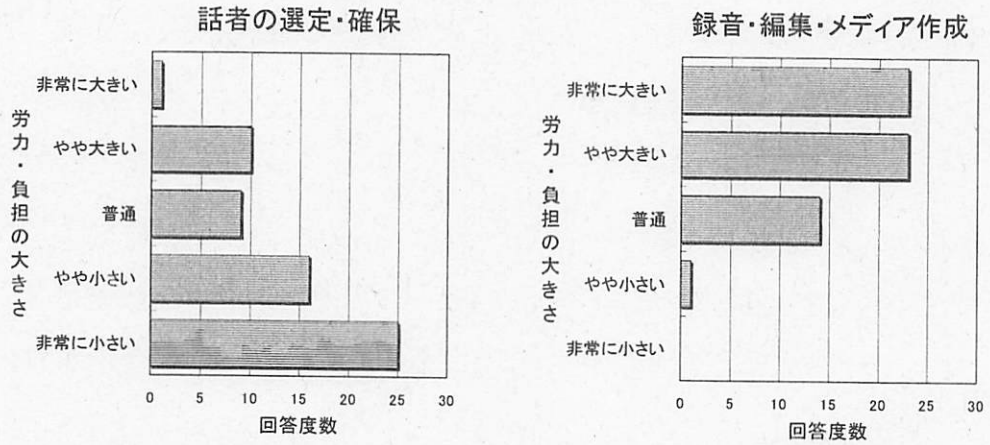


図2：リスニングテストの問題作成段階の労力・負担の大きさ

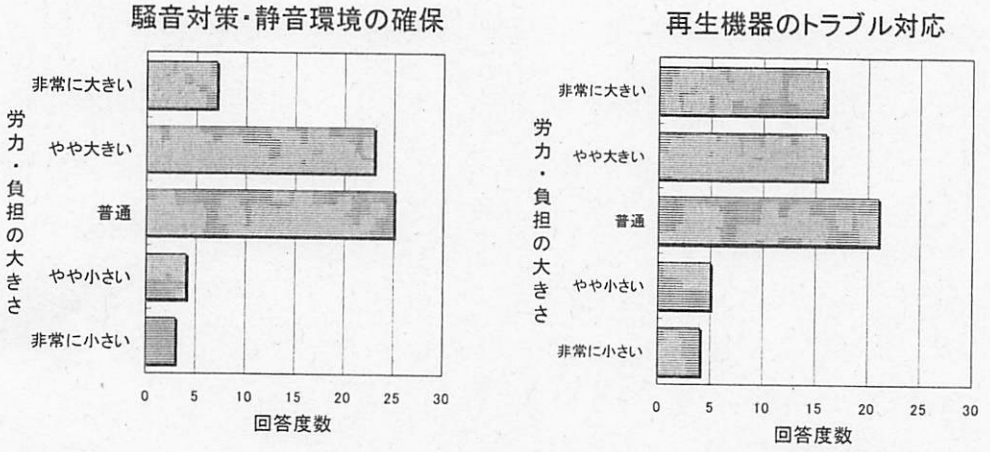


図3：リスニングテストの試験実施段階の労力・負担の大きさ

3.2 個別試験のリスニングテストを廃止した大学と継続している大学の比較

3.2.1 センター試験のリスニングテストと比較した場合の試験問題の特徴

各個別大学のリスニングテストの問題をセンター試験のリスニングテストと比べた場合の違いについて，個別リスニングを廃止した調査ユニットと継続しているユニット別に回答をまとめた。発話スピードとスクリプト長に関する結果を図4に示す。

発話のスピードについては，いずれも「同程度」と回答した調査ユニットが最も多いものの，個別試験でリスニングテストを継続している大学では，センター試験より「速い」と回答した調査ユニットが4割を占め，「遅い」と答えたところは見られなかった。

また，スクリプト長という点については，個別リスニングを廃止した大学では「同程度」とする回答が最も多いが，継続している大学では「長い」と回答した調査ユニットが最も多い。

すなわち，継続して実施している大学では，自大学の試験問題のほうが，センター試験のリスニングテストよりも発話速度が速く，また英語の分量も多く，全般的に難易度が高めであるという認識があるとみられる。

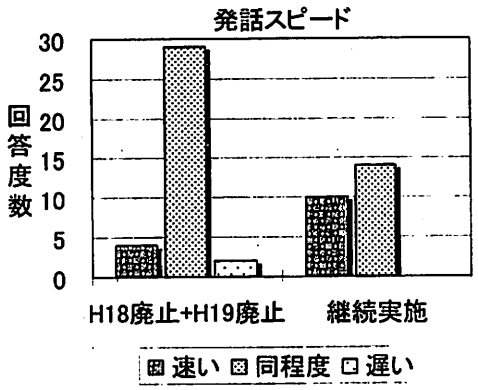
3.2.2 個別リスニングテストの廃止理由

平成18年度，または19年度に個別リスニングを廃止したカテゴリAとカテゴリBの調査ユニットに対して，廃止した理由について回答を求めた。

図5に，各理由に関する回答度数を示す。「リスニングテストの実施による効果が見られなかった」とした調査ユニットはごく一部であり，「求める学生像(アドミッションポリシー)が変化した」という訳でもない。

しかし，「試験実施にかかる人的・経費的負担」については多くの調査ユニットが当てはまるとしている。さらに「問題の作成にかかる人的・経費的負担」が主な廃止理由であるとしたところはかなり多い。リスニング実施の効果は認めているものの，実施の負担感がかなり大きいことが伺える。

さらに「センター試験へのリスニングテスト導入」についてはほとんど全てが「非常に当てはまる」と回答しており，センター試験のリスニングが，自大学のリスニングと代替可能であると判断した状況が伺える。その他の理由としては，問題作成や実施にかかる労力の大きさに対して募集学生数とが見合わない，出題ミスや機器の故障のリスクが高いといった記述がみられた。



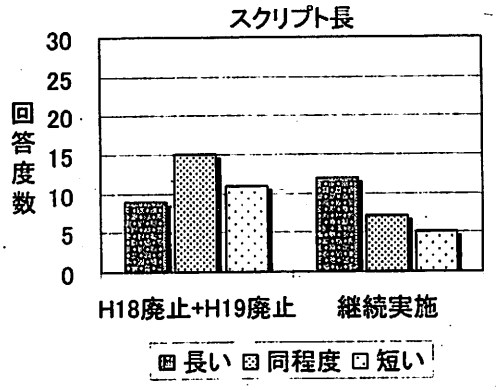


図4：各個別大学のリスニング試験問題をセンター試験のリスニングテストと比べた評価

廃止理由の自由記述　各調査ユニットに固有の状況を反映していると考えられる自由記述の内容を列挙して次に示す。

・やはり個別にリスニングテストを作成することは，かなり労力がかかった。センター試験リスニングテストに期待します。
・センター試験のリスニングテストよりも上質な問題を作ることは不可能であると判断した
・問題作成から実施まで，コントロールのきかない要素が多かった。最善をつくしたが，大学個別に対応できる範囲ではないと思われた。
・後期日程試験が「センター試験の成績で合否を判定」することとなったから

ここまでの結果から読み取れる点としては，まず，リスニングテストは試験問題の作成にかかる労力・負担が過重であること，そして，入試の省力化のためにセンター試験のリスニングテストを積極的に利用するといった判断を行った様相が伺える。

個別リスニングの再導入条件　さらに，既に廃止した個別リスニングを，改めて再導入する条件についても，自由記述による回答を求めた。次に記載された内容を悉皆的に列挙する。

・センター試験のリスニングテストが中止になった場合
・センター試験でリスニングテストがなくなった場合
・センターがリスニングを取りやめた時
・センター試験リスニングテストの廃止が望ましいので，廃止された場合
・入学後の学生のリスニングに関する学力が一定レベルに達していなかった場合
・入学生の Listening 能力に問題がある場合
・学生の学力が著しく低下した場合，入試時の人的・経費的負担が減った場合
・全学的に，教員養成に必要な英語力について合意がなされれば

これらの記載から，個別リスニングを廃止した大学であっても，入学者の英語リスニング能力の学力担保が最重要課題であることが読み取れる。

個別リスニングの代替的な役割を担うセンター試験のリスニングがなくなった場合には，個別リスニングによる選抜が再度必要になると考えている。さらに，センターのリスニングが入学者の選抜に十分機能しない場合にも，再導入が検討される可能性が示されていると言える。

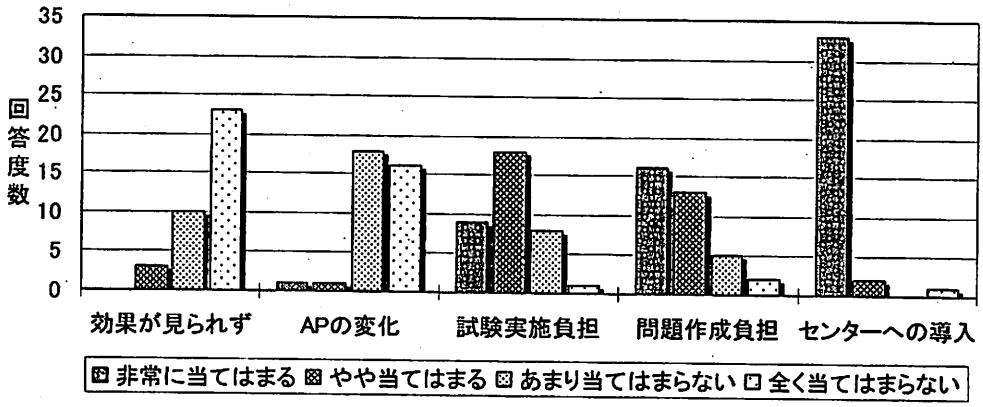


図5：リスニングテストを廃止した理由（カテゴリAとカテゴリBの調査ユニット）

3.2.3 個別リスニングテストの継続理由

個別リスニングを継続しているカテゴリ C の調査ユニットに対しては，継続する理由について回答を求めた。5 つの観点ごとの結果を図 6 に示す。

「これまで実施してきたリスニングテストに一定の成果があったから」，「自大学の選抜における有効性を考慮して独自に問題の設計を行っているから」については，いずれも確度高くあてはまると答えており，あてはまらないとする回答は皆無であった。

さらにセンターのリスニングとの対比では，「センター試験と異なる出題内容・形式のテストを行う必要があるから」，「より高度なリスニング能力を入学者に要求するから」にいずれもあてはまると答えている。

一方，「センター試験のリスニング得点を選抜に利用しないから」については，大部分が「当てはまらない」と回答している。

これらの結果からは，自大学の個別リスニングの独自性・必要とする水準について強く認識している様子が伺える。さらに，継続している大学・募集単位の名称から，すなわち外国語学部や英語教員養成系など，その大学・募集単位に固有の事情を反映している可能性をあげることができよう。

4. まとめ

個別試験でリスニングテストを課す場合，その運営にあたっては，試験を実施する労力にも増して，音声を扱う問題作成にかかる負担がかなり大きいことが見出された。

個別のリスニングテストを廃止した大学では，センター試験のリスニングテストが，個別試験のリスニングテストの役割を補完し得るものとして捉え，個別リスニングを早期に廃止し，入試運営の省力化を図っている様子が見られた。

一方，個別のリスニングを継続している大学では，学生に求める英語コミュニケーション能力の質や水準の担保を，個別試験に大きく担わせている。すなわち，独自の問題設計を重視し，センター試験よりも高度なリスニング能力を入学者に要求していると考えられる。

なお現在までのところ，旧帝大系の大学では，個別リスニングの廃止・継続が混在しており，その違いの理由が必ずしも明確ではない。このような状況の解明のためには，個別リスニングを継続している大学，新規導入した大学の問題作成体制，試験の実施体制について，さらにより詳細な調査が必要になると考えられる。

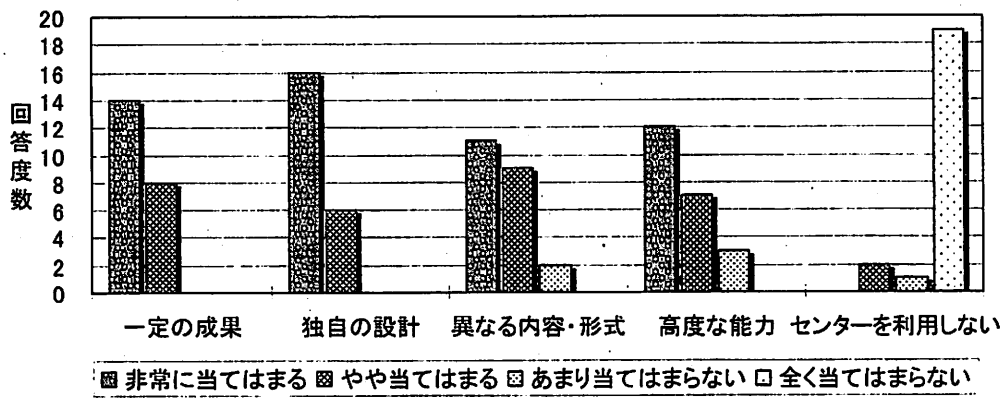


図 6：リスニングテストを継続する理由（カテゴリ C の調査ユニット）

参考文献

文部科学省高等教育局学生課大学入試室 (2004). 「英語」のリスニングテストの導入について 大学入試フォーラム No.26, 大学入試センター, pp.24-29.

国立大学協会・公立大学協会・大学入試センター編 (2004). 平成 17 年度国公私立大学ガイドブック [入学者選抜方法一覧] 上巻 大学入試センター.

国立大学協会・公立大学協会・大学入試センター編 (2005). 平成 18 年度国公私立大学ガイドブック [入学者選抜方法一覧] 上巻 大学入試センター.

国立大学協会・公立大学協会・大学入試センター編 (2006). 平成 19 年度国公私立大学ガイドブック [入学者選抜方法一覧] 上巻 大学入試センター.

内田照久・菊地賢一・中畝菜穂子・前川眞一・石塚智一 (2002). 英語リスニング・テストにおける音声の時間構造と提示情報の様式が項目特性に与える影響 教育心理学研究, 50 (1), 1-11.

内田照久・中畝菜穂子・荘島宏二郎 (2005). 英語リスニング・テスト実施時に各種騒音が与える影響 日本テスト学会誌, 1 (1), 117-127.

内田照久・大津起夫・石塚智一 (2006). 英語リスニング・試行テストの実施経過と受聴機器選定のためのアンケート調査結果 大学入試センター研究紀要, No.35, 1-18.

内田照久・大津起夫・椎名久美子・林 篤裕・伊藤 圭・荘島宏二郎・杉澤武俊 (2006). 個別音源方式による英語リスニングテストの予行実施調査 日本テスト学会誌, 2 (1), 41-47.

内田照久・杉澤武俊・椎名久美子・大津起夫・荘島宏二郎・林 篤裕・伊藤 圭 (2007). リスニング・モニター試験と改良版 IC プレーヤー試作機の実地検証調査 大学入試センター研究紀要, No.36, 1-29.